変わる日本の「暮らし」と「まち」

no.46

未来への架け橋となる中学生が災害公営住宅に見た明日への希望

岩手県大船渡市・所通（ところがよい）東地区災害公営住宅（2015年◆平成27年）

里中高志
Satonaka Takashi

illustration：Shigeyuki Sakata

作られたばかりのまっさらな部屋のなかに、中学生たちの歓声が響く。「きれーい」「この風呂入りたい！」。そんな感想を素直に口にしているのは、岩手県大船渡市立越喜来（おきらい）中学校1年の生徒18人。UR都市機構が手がけた3階建て20戸の災害公営住宅を、社会科見学の一環として訪れた。きらきらと輝く36の瞳が、部屋のすみずみまでを見つめている。

東日本大震災に被災して、これまで仮設住宅暮らしを余儀なくされていた人たちが入居するこの災害公営住宅は、越喜来中学のすぐ近くの敷地に建てられている。校舎の窓から段々と出来上がっていく建物をずっと見ていた中学生たちだが、実際に中に入るのは初めてだ。

まずは集会室で、UR都市機構の松本京子が中学生たちに説明する。2015年の4月にUR都市機構に入社したばかりの松本が、今回の社会科見学のプロジェクトリーダーだ。

「URというのは、アーバン・ルネッサンスの頭文字を取っています。都市の再生という意味で、私たちUR都市機構は、全ての人々がいきいきと暮らせる都市をめざして仕事をしています」

災害公営住宅とは何か。建設にあたってはどのような仕事があるのか——。真剣な面持ちでそれらの説明を聞く、まだあどけなさを残しながらも、大人への階段を着実に歩んでいる年代の生徒たち。この少年少女は、あの3・11の震災のときにはまだ小学校2年生だった。そして彼らの前に立つUR都市機構の松本京子も、震災のときは大学の後期試験を直前に控えた受験生だった。あの震災から、確実に流れている5年弱の年月。長くもあり短くもあるその時間を経て復興は進んでいるが、そこにはゴールを目指している人たちがいる。それを理解してもらうのも、この社会科見学の目的のひとつだ。

交流のアイデアを発表

説明会では、この災害公営住宅の建設に携わったUR都市機構の木下彰子と、株式会社匠建設の冨田高一郎所長が登場し、今回の計画だけではなく、建設という仕事に携わるようになるまでのいきさつも含めて語りかけた。質問コーナーでは、「何人ぐらいがこの建物を作るのに関わったんですか」「この職業を選んだ理由は」といった問いから、「彼氏はいますか」といった中学生らしい質問までが飛び出す。大船渡市のマスコットキャラクター、おおふなトンも同席して、生徒たちに囲まれる一幕もあった。

そして4班に分かれての住宅見学。各班ごとにURの職員が案内して、さまざまな設備にどのような工夫がしてあるかを解説する。

「この施設は受水槽といいます。なんのための設備でしょうか？」

「この避難はしごはどういう時に使用するもの？」といったクイズが要所要所で出題され、元気よく答えを口にする姿があちこちで見られた。

そして集会室に戻ると、中学生たちは、災害公営住宅や近隣に住む人たちと交流するならどのようなことをしたいか各班ごとにアイデアを発表。

「集会室を使ってお年寄りの方とお茶を飲んだりお話したいです」

「越喜来中学校では震災前には市民運動会をやっていたみたいなので、また開きたい。そして近くの食堂で食事も一緒にしたいです」

「公営住宅の前にある花壇に苗を植えて、土いじりをしながらいろんなことを話し合ったらどうかなって思いました」

「まずラジオ体操をする。そして、その後お餅を作ったりすごろくやお手玉をやる。そうして最後にお餅を屋上からまきたいです」

ひとりの男子生徒が提案したのは、餅まきという建物の上棟式のあとに屋上から餅をまく行事をここでもやりたいというもの。大船渡でも広く行われているこの慣習を、ここに入居する人たちと一緒に楽しみたいというアイデアに、歓声が広がった。

生徒たちを引率した大和公恵（きみえ）先生は、この日の見学についてこんな感想を。

「実際に中に入ることで、入る人のことや暮らしの様子など、改めて考える機会になったみたいです。復興の一端を見ることもできたし、URさんがどういうお仕事をしているのかを聞くことでキャリア教育の一環にもなりました」

実際に中学生たちに話を聞くと、思い思いの感想を伝えてくれた。

「見学して楽しかったです。部屋はきれいだし、中学校とも近いからお年寄りとすごろくや、あやとりをして交流したいって思いました」（菊地恵子さん）

「うちは6人家族でうるさいから、集合住宅には住めないかな？って思うけど、実際に中身を見ると綺麗だし、一度は住んでみたいです」（花崎踊さん）

「津波でたくさんの家が流されたけど、こうしてその人たちのために家を作ってくれて、すごいなって感じました。ライトをつけるボタンが低いところについていたり、お年寄りのためにいろいろ工夫がしてあるのもすごいです」（三浦環（めぐる）さん）

UR職員から説明を受ける災害公営住宅を見学中の中学生

中学生たちの反応について、UR都市機構の仕事について説明した木下彰子はこう手応えを話す。

「楽しそうに住宅を見学してくれたし、質問も『建てるのにどれくらい時間がかかるの？』とか、建設についてのものがかなりあったので、URとしては嬉しかったです。住民の方と交流したいという中学生のアイデアが、現実のものとなるといいですよね」

このまちを受け継ぐ生徒たち

今回の社会科見学をURと一緒に取りまとめた、大船渡市都市整備部・住宅公園課住宅管理係の大津泉係長が嬉しそうに話す。

「越喜来地区は戸建てが多くて、鉄筋コンクリートの集合住宅というのはこれまでなかったんです。子供たちも学校から近いだけにどういう建物なのか興味があったと思いますし、何より復興や被災者の方々について勉強する非常にいい機会になったと思います。URさんは建物を建てるだけではなくて、いつもソフト面の事を考えてくれる。今回の社会科見学だけでなく、コミュニティー形成支援や地域貢献を重視してくださっているな、というのが伝わってきます」

UR都市機構の松本京子は最後にこう語った。

「私たちはいずれこの大船渡という土地から、離れていくことになりますが、今回見学した中学生たちは、この大船渡を受け継いでいく立場。だからこそ、この災害公営住宅も見てほしかったし、中学生たちがまちに貢献していく未来を想像する手助けになったのなら嬉しいですね」

7年後には、この少年少女たちは成人式を迎え大人になっていく。だからこそいま、震災の記憶をしっかりと受け継ぎ、さらなる新しい未来への架け橋となってほしい。そんな思いが、今回の社会科見学で彼ら彼女らにもきっと伝わったことだろう。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社